

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 吉川 也志保
論 文 題 目 フランス国立図書館の形成に関する研究
—知的遺産の保存と公共性をめぐる理念と実践—
学位取得年月日 2008年7月31日

第1部 本論文の課題

本研究の主題である国立図書館 (Bibliothèque Nationale ; 以降、BNと記す) は、国王の個人的なコレクションを収蔵した国王図書館 (Bibliothèque du Roi) を起源として、1792年に国の公共図書館として誕生した施設である。この図書館は、19世紀に入ると度重なる政治体制の変化のため帝政期には帝国図書館 (Bibliothèque Impériale)、王政復古期には王立図書館 (Bibliothèque Royale) といったように幾度も名称を変更しているが、本稿では混同を避けるため、時代に関わらずBNという呼称を併用することとする。

現在、図書館史研究の主流としては、以下の二つの傾向を挙げることができる。第一の傾向は、図書館の所蔵資料に着目して、コレクションの形成過程をたどる研究であり、第二の傾向は、図書館の利用拡大や図書館員の技能、あるいは図書館建築という側面に注目することで、近代ヨーロッパにおける図書館の発展を、公共性の向上という観点から考察する研究である。

第一の傾向を持った研究の歴史は古く、1874年から1905年までBN館長に在職したレオポル・ドリル (Léopold Victor Delisle) は、自身も歴史家であったことから、BN所蔵の写本に強く関心を持っており、シャルル5世の旧蔵書など、様々な歴史的コレクションの目録を復元する研究を行っていた。それより以前の18世紀末には、ル・プランス(Nicolas Thomas Le Prince)の『国王図書館の歴史考*Essai sur l'histoire de la Bibliothèque du roi*』が発行されている。同書は17世紀以前の刊行物および手稿資料などを典拠としており、19世紀においてもルイ・パリ (Louis Paris, 1802-1887) によって、BN史を扱う上で最も信頼のおける定本として再版されていた。国王図書館の通史は、ル・プランス以降も数多く出版されてきたが、この分野における緻密な研究書としては、シモーヌ・バレイエ(Simone Balayé)の『BN —その起源から1800年まで— *La Bibliothèque nationale, des origines à 1800*』が挙げられる。

BN史研究において、アンシャン＝レジーム期からフランス革命に至るまでの研究は、19世紀以降を扱った研究よりずっと多いといわれているが、それらの研究の大部分は第一の傾向に沿っている。こうした傾向の前提には、アンシャン＝レジーム期までの書物の生産量や利用者数も関係している。そもそも、フランス国王シャルル5世が私蔵書を形成した14世紀には、活版印刷も発明されておらず、書物の大半は写本であり量産には不向きであった。このため、書物自体が希少で高価であったこともあり、数千冊の蔵書を保有していた大図書館であるとみなされた。無論、フランスの国王図書館も大図書館であったことには変わりはないのだが、18世紀までは蔵書数、

利用者数ともに19世紀半ばのそれと比べれば格段に少なく、国王図書館では、蔵書をいかに利用者にとって便利なものとして供するか、いかに公共性を高めるかといった問題は意識されていなかった。このため、第一の傾向に沿った研究が主流になるのも当然であろう。なお、バレイエの研究は、コレクション形成の観点に加えて、図書館における人事や利用面に関する分析も行っており、第二の傾向も併せ持っていたという点で、高く評価されている。

一方、数少ない19世紀フランスの図書館を扱った先行研究をみると、19世紀パリにおける市町村立図書館利用者を題材として扱ったドニ・ゲラン (Denis Guérin) の研究、公共図書館の成立をフランス革命直後から、第三共和制にいたるまでの教育政策と関連付けて考察したジョン・シャン (John Champ) の研究、19世紀後半におけるBNの公共性の向上と近代化を扱った赤星隆子の研究が挙げられる。

これらの研究には、全体的な変遷を公共性の拡大による近代化の進展という観点から分析している傾向がある。しかしながら、本研究では、BNを公共図書館の枠組みで捉えた視点からは見えてくることのない側面にも着眼する。

本研究で扱う国立図書館としてのBNの形成過程で生じてきた課題とは、大別して、第一に、資料保存施設であるという共通点を持ちながらも異なる社会的役割を担う文書館や博物館との境界を模索することであり、第二に、急増した所蔵資料の保存に関する対策である。これまで殆ど取り上げられることのなかった、この二つの観点から国立図書館の成立過程を読み解くのが、本論文の課題であり、独自性である。

第一の観点として、図書館、博物館、文書館という各施設は成立したときから、明確に所蔵資料の境界が示されてはいなかったことは、あまり注目されることがなかった。その点に関して、1994年から1995年にかけて、ジョルジュ・ポンピドゥー・センター内公共情報図書館の分析・研究課が開催したセミナーでは、博物館、図書館、文書館という三大文化施設のあり方を検証することを目的とした問題提起が行われた。しかし、図書館史研究において、博物館および文書館といった他施設との関係は、いまだ深くは研究されていない。ベッド・オリヴァーは、フランス人研究者の二次文献に多くを依拠しながら、フランス革命を経ることで国立の美術館と博物館がいかに設立されたかという問題に取り組み、両者の創設が政治的プロパガンダとして利用された可能性について言及しているが、本論文で扱うこととする両機関の交流に関しては一切触れていない。しかし、複合施設的な特色の強いBNの性質を理解する上では、文化施設という面で類似した機能を持つ、ルーヴル美術館や、国立文書館との関連や、機能分化という側面に着目したアプローチが有効である。

第二の観点の背景としては、19世紀半ば、BNの利用者・新規収蔵資料がともに飛躍的に増大した一方で、それにもなって生じる慢性的な書庫不足や、製本修復といった資料の保護対策の不備といった問題が生じるようになったという事情が挙げられる。

図書館の社会的な役割は、資料の保存と利用の双方であるにもかかわらず、今日では図書を公衆の利用に供することのみが重要であるように認識されている。しかし、後述するように、BNが国王図書館の頃から現在まで保持し続けている理念のひとつは、納本制の開始以来、刊行物に代表される知的遺産の網羅的収集および継承である。フランス語で図書館を指すbibliothèqueの語

源にあたるギリシア語のβιβλιοθήκηが意味するところは「本を収める箱」であり、ギリシア人は「読書施設」ではなく、「図書保管施設」に「図書館」という名を与えていた。元来、図書館における第一の使命は所蔵資料の保存だったのだ。

以上の観点から、本論文では、BN文書部門およびANで所蔵されている未発表の史料を数多く扱い、1792年に誕生したBNがアンシャン＝レジーム期から受け継いできた知的遺産の保存という役割を果たしながら、19世紀後半に登場した新たな課題、すなわち公共性の向上という要請にいかに対応したかを検討する。これら異なる二つの使命は互いに矛盾する要素を含み、両立させることには大きな困難が伴う。それを克服しようとする過程で浮かび上がる理念と実践との葛藤に着目することで、BNの近代化に関して新たな問題を提起し、従来とは異なる展望を示すことが期待できるだろう。

第2部 本論文の概要

本論文は2部構成になっており、第1部ではBNにおけるコレクションの形成および再編成を他の文化財保管施設との関わりを意識しながら論じる。第2部では公共性の向上にともなう様々な変化を、資料の利用という側面のみならず、資料の保存・管理という側面から捉えなおすことを目的とした。

第1部第1章では、BNの図書収集・公開の歴史を振り返ることで、過去と未来を知で繋ぐ架け橋である図書館資料の継承について考察を深めるために、アンシャン＝レジーム期からフランス革命までの国王図書館の歴史を概観し、国王図書館がどのような理念の下に形成されていったのか、また図書館でありながら、どのような経緯で文書や手稿、貨幣、地図、楽譜、考古資料などの非図書資料を収蔵していくことになったのかをたどる。さらにフランス革命が国王図書館におよぼした影響、および国有化された教会財産や亡命貴族の旧蔵書を含む多数の没収図書がBNの元に吸収された過程について考察した。

第2章では国の中央図書館であるBNと他の図書館や文化施設との資料交換を通して、BNの位置づけを探った。フランスの場合、国立図書館と国立美術館は、王立起源であるのに対して、国立公文書館はフランス革命政府により設立されたため、新しくできた国立公文書館（Archives Nationales；以降、ANと記す）とBNは、ともに文字資料を扱う施設であるので、政府が両者の差異を明確に定める必要性が生じた。

第2章第1節では、第2章第1節では、ANの設立により生じた文書資料の再分類、およびBNとの資料交換が直ちに実践されなかった原因は、高度な専門知識が要求する分類作業を行う人材の不足や、資料群（fonds）の解体に対する恐れであったことを示した。

第2章第2節では、パリにあるサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館、マザラン図書館、ソルボンヌ図書館、アルスナル図書館からBNへの非図書資料の集中化が図られていたことが確認された。第2章第3節では、1860年代に召集された帝国図書館および帝国公文書館に関する委員会によって、

図書館と公文書館の境界がより具体的に指示されたことを明らかにし、第2章第4節では以下の史料を取り上げることで、図書館資料と博物館資料の違いが19世紀後半にはどのように認識・解釈されていたかという問題に迫った。その史料とは、1870年代、学術的に価値が高いと判断されたパピルス文書が公売に出された際に、BN、ルーヴル、公教育相の三機関で交わされた手稿書簡である。このように、図書館に対する公文書館および博物館の機能分化は、徐々に進んでいったのだ。公衆に対する読書の普及には貢献しないものの、学術的価値のある文書を博物館ではなく図書館で所蔵するように要請した例であり、この事例を考察することで、当時、BN館長を務めていたタシュローは、BNの学術施設としての意義を強調しながら、ルーヴル美術館とBNとがコレクションの争奪に競合することのないよう公教育省に訴えていたことが認められる。

第2部では、第1部で明らかにしたBNの所蔵資料の性質を理解した上で、公共性の向上に伴う様々な変化を、利用者の増加という面からだけではなく、資料の保存・管理という面から捉え直すことを試みた。第2部第3章においては、図書館で資料を実際に維持・管理する際に伴う問題点を整理する。図書の保存方法に関する問題意識は、19世紀になってから急に生まれてきたものではなく、ヨーロッパの図書館関係者の間では、中世から『フィロビブロン *Philobiblon*』に代表される図書の保管方法を記した著作は存在しており、フランスではガブリエル・ノーデ (Gabriel Naudé) の『図書館設立のための提言 *Avis pour dresser une bibliothèque*』においても具体的な試案が示されている。第3章第1節では、これらの著作から、ヨーロッパでは早くから図書館における蔵書の保存・管理の重要性が自覚されており、特に以下の二つの点が重要視されていたといえる。第一に、虫やカビなどによる生物劣化や火災を防除するための保存環境への配慮、第二に、利用者が読書する際に引き起こす破損や劣化を抑止する対策である。前者の対策を行うには、蔵書を保管する図書館の立地と建築や書庫の配置が重要であり、後者の対策には、利用者への注意の喚起や、材質の脆弱な本の保護をするための適切な製本が重要である。しかし、19世紀以降は、ここに挙げた蔵書を保護するための方策の実践に支障がきたされるようになる。その要因は、BNを取り巻く状況の変化にある。第3章第2節および第3節では、フランス革命期の没収図書が吸収され、出版点数が急増したことによって新たに引き起こされた弊害を明らかにした。続く、第4節では、BNにおける所蔵資料の飽和状態を打破するための対策として行われた19世紀後半におけるリシュリュー館の改築による構造的変化を概観した。

第4章では、法令やBN職員らによる図書館報告書をもとに、利用者の飛躍的な増加および閲覧状況を浮き彫りにすることで、同時代人たちも図書館資料の脆弱さや利用過多による資料の劣化に危惧を抱いて講じた様々な対策について論述した。特に、第4章第3節では、第3章で取り上げたBNにおける一連の改築を経た後、新たに設置された書庫が建設された30年後には飽和状態になっていたという実態を明らかにした。そして、図書館における資料の保存と修復に大きく貢献しながらも、これまであまり着目されることのなかったBNの製本工房の実体についても取り上げ、蔵書保存対策として行われた装丁および修復措置の種類を明らかにし、工房で処置を行った年間総数は所蔵刊本の総数の約1%でしかなかったという状況を浮き彫りにした。

第5章では、19世紀の間は両立の難しかった利用と保存の双方を実現する対策が、20世紀以降いかに引き継がれたかという課題に対して、BN内の機能分化という観点から考察し、リシュリ

ユ一館から雑誌を分離して保存するため生まれたヴェルサイユ分館の設置、トルビアク館の設立および新たな資料保存機構などを通じて、20世紀における軌跡をたどった。

BNは、非図書資料を保有する複数の収集室の複合体であった国王図書館に基盤を持ちながらも、19世紀を通して徐々に図書館としての独自性を確立しつつあった。公共図書館として万人へ資料を公開することで公共性の向上を考慮しながらも、BNは所蔵資料を分類するのと同様に、研究者と一般利用者を分類することで、読書施設および学術施設としての機能を両立しようとしていた。同時代資料の量が旧来の古典資料を大幅に上回るようになってからは、古典資料と新聞などの同時代資料を別々に保管することを提案したBN館長ドリルらの方針は、BNにおける知的遺産の網羅的な継承を遵守しようとした姿勢が読み取れる。

今日、国際的な資料保存活動の中心地として比類なき活躍を見せているフランス国立図書館は、その形成過程において、フランス革命以降、度重なる政変や、社会的環境の変化に対応し、利用者にも区分を設けるということで資料の公開性を尊重しながらも、所蔵資料を過去から未来へ受け継ぐという納本制度発布以来の理念に基づいた方策を、19世紀の間も一貫として実践しようと模索していたのである。